連歌提要切帋

全

伊地知文庫
文庫20
240

雑20
290

伊地知氏書册

提要集二十三箇條切帋

疑の哉

一

哉と爲るもの字ハ擬かと用ゐるの言扱
と疑乃哉と乃至　云仍秘扱同之

咲蕊のゝ墨ハ波の玉藻ハ　宗砌

ゝゝゝゝゝ月白桂乃末遠ゝ　親南

ちく羅ハ時ゝゝゝゝ山もん源氏ハ

ゝゝの影ゝ玉藻の末遠の源氏ゝと爲ゝ爲ハ

人る一下の句八撥ねるなり仮字なく仮之招の
ながらの碧屋一紙くゝ智よ屋一

うと疑ひぬ句法　二

新つゝふかまきの毒尾うの字の件
紹巴抜ふ新猩の句字の件　服部ふ人くゝ赤
鶯の毒尾うと疑ひ仕る中ふいたれぬる
ちをきうゝやふふ句ふ人ゝ卜侍らん

誰と成と為る句法　三

句の袖うゝゝゝ山吹の句ふ　祇
旧歌よ然と疑ひ句ふ
うゝと為るちうゝと為る北沢信用ふ屋
北句誰ふうの字ふくゝ押へゝ成と法定ふ
仮ちを

義さうゝ誰ふ芋人ある日教うる　長
芋も誰とふ疑ひをこの字ふ義人金尼
うゝ句ふ芋人ある句ふ芋人ぬ日負成と法定

[illegible]

雖の字ハ[illegible]の義也　已

[illegible]ハ[illegible]の字[illegible]把[illegible]雖の訓[illegible]

[illegible]角[illegible]の義と成

定[illegible]

一字[illegible]訓[illegible]

[illegible]義ハ指[illegible]我の外

[illegible]ハ義[illegible]小[illegible]特

[illegible]ハ現在の[illegible]を[illegible]ハ切[illegible]

[illegible]第[illegible]義ハ指[illegible]様小[illegible]義[illegible]

[illegible]時[illegible]

[illegible]ハ切[illegible]

義[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

而於則切

鹿の声とうつきハ庭の紅葉山　雪頂

深山おもはけハ行くしの秋の山　宗頂

是〳〵の彩く花の声とうつき学と行ひうる

羽光切るなり深山おのおのの学と疑ひのこと

然〳〵毎る羽光是〳〵ハ也ひて示ハ現在のて

ものとハなり中というなりとを句中ハ法るなり

志始〳〵深て〳〵析なるハ清の〳〵なる義と毎ん

仏人の入生〳〵原と知なるなる義婆ハ元の仏ん

又

仏の河世なるせハ〳〵の声　玄的

本歌こ

仏のなる世なるせハいうとうくれたの新しるれ

是ハ本歌の上句を引遠〳〵毎る仏く仏の河世

なるせハと彩ひ毎る外ハ小多く立然〳〵てさる

也〳〵切るく仏のある世なるせハとしせ書とうふ

これ術になりて其ものとすゝハいはゆるれし
ともに上にある字の字清らかなるもの又
拾遺
役所にハいれ難き言葉ハ上にいふ川の解にてしるへし
此今役なき也に役所にいふて読ひらる役所にハ
いれよハつかさる例くも五文字にて切て役所に
言葉にて役なりあハいれとして上にいふもと八なりて是
あそれも字のてにをは継て置事しお
もひ所ハ康の宿のもの字もはしるもし

表に切字無き発句の事　六
をしきもあり其中ハせぬを親
此句字に所ハ凡字の字ハ付字なし此手をしる
則ち所あハせぬとなりしいふ字とあるかのよす
源くみる古くある古今の書くてかるとし多
ふきとれなしてくし文
神垣にかゝりて久しき杉の雪
是もなと久しきとおもひいふ字ハとめてみる也

玄仍秘抄より此發句の作者なれども久しくしらざりしを宗祇直しゝ中さまとなり此作より

いにしへの此秋よりとなく

定家

續後撰

秋と毎年時雨の降る生田の森の下草

此歌をかりとり色づくと添へて

句をたかくしらべ

色文字切　言葉ハ一七

松風をかりて出る秋の声　祇

たゞ一まとゝ思ふものを春の雨　巴

此歌を色文字より毎段句の字をとりて

句毎に句に又句を玄仍此毎段句に

会釈工夫して知るべきなり文字の色いつれも

七りの赤なりとも我松風の句なり出る

歌より秋を知るとなく松風と萩の葉にそよ

ぐを出るいにしへ秋を玄参るゆゑよりなり

いにしへを玄仍一毎に巴句ハ毒を称名院

歌に比して云ひまさるといふ心を本歌に
まさると云様也 古歌に
思ひしれとも物を云ふかしと無下に云ひし也
無縁との字下に付といふ字を入てこれハ大概
遠ふる歌にをとりしと云ふ所をと
とらりある事ハ多く心の様るて母いふ歌に七
のをとゞまりふ 上の句を埋るし移の思ひを恐心と
くるなり文云様なと

鳴鶏の声にかきさゐく志の音もでぬ夢の移ろひを
物おもひ人毎大かさの露にも移ろひを
待て物おもふ移れる袂ならぬといふ心を
詞の外にいひ様せて文物をといふ事にハ此哥に同じ

玄妙之発句 玄妙といふ 八

名もたかき月や桂を折つらん 宗祇
風もうき世のこの葉無常様なん 行助
此格式なり一句の中に切字三つ乃至五ありしに

現在のし中小字の字あるにたゞ字としも終字留ハ
上の切字二重て大概しの字りの字を上にて重キ
字の字を中にて重出てしるすのてもいとも此之
宗雞説ニ五文字まて切て出へしとあり遣行助
句ハ上手流も留をとりて然れハしもにならさる
中七字の字を重ハ定法なるへし但文の州抄ニ
字の字留もある也
印の花もいつまて雪とやみん　兼載

平点之上手切字二重之名て字留と心得へし
此是切字二入しては其餘すへからん
梅の残るもあらぬ雪の白ふらん　睦雪
是も舞台の御発句とも来たる雖切を可く
宗長点ニても上手切字二有ても切ある
へし此日記留の発句に可付て
も有し留　九
渋瀬に雪にそおもはぬ聲もなし　残

北斎の名の出る所　柏

我日ゝなりとゝ句の中の字に俳諧師と全
いふ字のもの字あるを毎朝の手ゝ
きゝなりとゝいふと考えて俳諧師の所に
ゝゝいふ日なし

舟我舟句のもなりと北斎よ遠ゝ
北細北く句作者一

名ゝ第三

十

小田ゝ原の下水ゝ　我
のゝゝなる時の松乃ゝ舟　我
休類西説云名句の第三切字有ゝ
ゝく

中の字之句作　十一

北斎の字必上より八九月ゝ張ゝ
五月ゝ有ゝ一修合
ゝ天下ゝ嵐ゝ来ゝ之の句ゝ

又所景物下句

秋の夜半月よめるうた

嵐吹かれもしぬべきを

是ゝ云る中の字句ゝ

の負ゝ分ゝ

又句体の景物ゝ

ゝの中ゝ

相対ゝ

ゝの中ゝ

ゝ句ゝ

切字ゝ

いつゝ

地字のゝ

近ゝの字類名ゝ

ゝ

萬葉八

ゝ

此類しの事い所なし拾ひてあり名月の張
らに可用し秘蔵のみし

十三

指の庭

明るきに紙を見て清めん
是こい神玉の星紙に明るの所を字形く指定
て作定一毎の外をまるし作之指の張を
名付るなり

菊城を一雪の手水

是は菊城をくるるい雪消ると眼あを見
雪なれい色山を色くるるなり
と和字を面あるひのの

十四

世に表なるは雪の物なり
是いつあと和えに把の作を異しなるる
なり色は銀字を拭くもるる世に表あるを
雪の後をんとなるこいるを句作し
久しくのこのこはき書の日を色なく花の動ん

此格くも世界なる事なる歌句なれども山元宗の
ちるとんと山の宗をくゝ毎日歌
春風吹くと雨とくゝみん
秋風毎日吹きけぬゝん
此類に限定し九推量のことなるなり
哉といふ宗なるくゝ九類のことあるべし
ものなる知心の乃ふ歌なる
いつのとなる

十四

知るといつもの山とたゝ
婦人なるいつと昔の孫とひ毎
春日雖いつの宗この歌まきて
此類に能ひ毎なるゝ物とまゝ定る
心なるものと毎なるの句明毎なる
下歌くゝ冠の山を流れとなる故に
の句毎にいつとなる昔の海と冠毎と
明宗なる毎くゝ春日雖句宗の歌

つの花ちくはのしらつゆ
ちくとあるかの舞機は句にてのなを
歌に法定ちかへるを張在のてあるか

十五

下句てとめ

花ちるとやまのよそをは結うて
はなれい大原ハと相つくるを格こ但大こにてき
ある初句をとれいるをしかるとつめて前句
或いをは結す句にあるの上の初句はあるこ

結をとるをはなるをくあ
果をとるくかをくて結をは結うる又
義をとうこくをとまちかく
是いををとまちかくを義をと行前を上の句をる
かう

日ちかあ遠つをを栗ちる栗の花をとして
遠つをとるかをとるかの又を栗をくを修法を勝
定家の頭の歌三年六句の
修のしつるをこの月かをとして

都の俤よりとりあつめ名残をしくこそ
思ふ体体と合ひて連歌まことに興ある事
下の句をとり
雲を出る月の雨いはもとうつり
風い神よ雪いはもとうつり
相伴日ハ此句意一句の物と二句上の七文字まで
と下の七文字の事と二句に文字を重ねる
ことを嫌ひ句を切ル新しきの句意清茅
此類し但歌ハ句を切ル句法あり又初の上へ
つる句ハ句をとへ句体を切ル事ハ
五千句ハ一句句をとりあつめ
并後日相伴ハ此句ハ大原千句第七
風と雲よりあらし 枕 松ハ 雪 雲間遠清清新王
此句全体句意の物を並べ
とおりあつめ
句意の風い神よりとりあつめ
句を

後の歌より神かぜの
菊花賞の一格式より出る格とする所の
みやこ海
十七
こゝ海〳〵上より云てこゝ海
又字定あり〳〵ウクスツヌフムユルウ五言第三の言し
右の十五の字とんの字つけて立程伝授く
陸奥こゝ海舟をこゝ海と
こゝ海の下に海の字と立てこゝ海の
字むふてこゝ海則名所之の言し是を思ふ
さらに〳〵歌の名所〳〵居重の中に海の字を
歌枕名所言こゝ海伊豆の海神の小島海の海
是こゝ海こゝ海動極歌枕歌〳〵句又歌の連歌
みな定座のてにをの字なり
天さかるひなの長路とてきこゝ海
略の海北国の海と歌
長谷海の海

[illegible]く神さび

肖松庵曰ことさらに[illegible]と為まるまるくく

書法物の句てにをはすくく宜しくこの句くこう

くすくと心腑とおくし納はナ

十八

隅のてにをはのるす

あふ坂の関の山風袖を主

著まるこの主の格立賓

相伝曰逢坂の句袖をとりまるこの句の主し逢坂の

山風に寄せし作之隅のてにをはいとなるし格立の句

著まるこの主の格立といふ句の主なるく舟

為る賓なるを隅のてにをはるを不成し芭蕉翁

句ふすすく古人作例

[illegible]の句賓

雪中主

歌主

下ふまふこの山の賓

今年と[illegible]

たいつかまつりに御客をつとめ給ひ
賓主の礼に隅のてゝめいと入るなり

水の字をもの字とかゝるなり　十九

蔦きりを聖徳の象と除給ひ
古今よりの義の名を書よりはじめて又ゝ歌を書とき
自人の知恵〳〵法注より書よりはじめ作りきよ
をとゝいとゝ〳〵同集第八吉野山のわかれまく
人といふことゝ初まりの人よるゝと

人といふ法といふ法同新し又妹とよむと云初妹
小恋ふといふれかゝるし
妹よ恋和歌の初原ゝ也ゝ汐干のゝ潟露ける
ゝをゝ相面ゝ而於則ゝ思推ゝ
山市の妹と夕暮小夫路ゝ　宗仙
是ゝ妹ゝとゝいふ孔雀ゝ絵ゝ
於石蘿生
於妹（イモ）妹新し
晴ゝ雲のゝ

たとへば春の空のかすみ春雨のいとゞ花の春雨の
ふるあめ春雨の物とゝ（てゝ）花咲（さく）ときは
物いろ〳〵といふ事なし定家卿家集多く花も
月の心あり左の歌のはゝ用ひ
をしまれもとゝ梅もとゝ花咲の色香の名残
なん

二十一

四道の事

四道奥後口付元原　式部卿　従引離　出離
是四と四道といひ〳〵連歌の作句の根源と
なる道〳〵は物と絵かゝれて花と
春の霞のかすみ四の句作〳〵りかゝりと出家と
なる作法四道と根源と成句に二句つゝい
なれば離句とつゝハなれ作者下
離い連歌の命も特〳〵れい多くつきて
句つゝ作法一面も作り用ゆれい事
逆句い二句ゝ外い不宜事ゝ之ものゝ句世
句作もつゝまゝと婦人三代集の中ゝ作者

てうらくあり五代集みな雅言一代集なる事
程かくおきこゝに西行法師よりこの風
事世の人よ相応せり連歌はいうこゝ
但南世と上古い一廉あり〻〻耳よ立句と去
屋一体言あり〻〻すよりまるまきく上古を
体を耳よ立句初心の時思量を去べし
添句ハ山と云句よ樹陰岩陰よりあり
つけ文書日よのとの秋の月よ霜雪と作りを

立句ハ他に准ず
又心の添句と付る義よ名の名を名者
月よ日星なと作りを心の添句と付る
詩の面対と立彩し
従句と云風よ義のちる風世もよ船書日よ
雪きまる志如中よ況念なと作りを従句と
つかる
離句と云引句の神よく形句ハ妙引離の

句神と色の句といふ色の句あり
句の色とあるべきなれども
逆句とは引句なり孔雀外種に
有と云へる大異四道の類と出べし
毒を抜と作るべ　二十二
句の毒を抜のもよせぬやうに作るべ
悪いも抜いたらと言ふ少やうに大る
べきなり

かたくなるよ花の毒を抜
いたらまた生ずるやうに抜きべく
離の毒とかくべこと是なり
山ぶいさんの海中に書の色
地類しその毒を抜よ花山ぶんも
よ仕立ぶ神し地の毒を抜よ抜と作
べ　べきよ練事べ

青文毒文技作る神　二十三

毎一章より始る

俳山中の句を俳諧の事

我国前句に無文なる事

前句を長句に成句俳山のと有きなるべく

年俳の句を下句に付る時は有文なる

俳之孫山のと有るべく其の句と事

いう山中と句をとるべき有文より付るべ

仏句なし

切字之作　二十四

十八の名目なる切字を自己の外なる

一り同り意の二つなる出るを考へ

切字に格字と名づく

是成の山中尾の志るべくして格字

此法歌和哥連歌の切字の格之山中のもの

志るべ尾のことを知るべしるべし

此提要二十四ヶ條之切紙者予奉本
院橋蝶養ゝ秘書也先哲相傳室
予伝ふ只一人ゝ外不可有傳授者也

山本古道
樋富昌秀
中野白飛